

スタンダードの小説における手紙の機能

白田 紘

コミュニケーションの手段としての手紙は、今や主役を電子メールに譲り渡したかの感がある。先史時代から、媒体である石片や皮、木片や紙に、記号・文字を刻んだり書いたりして、差出人から受取人へと何かしらの手段によってその《原物》が運ばれていたものが、現代では、伝えるべき内容を差出人がコンピュータの画面上に記すと、それは遠近に関わりなく瞬時に受取人に送られる。電子媒体と呼ばれているが、それは運ばれるのが目に見えず、表記されたものが差出人のコンピュータから受取人のコンピュータに転送される。コンピュータ内に保存されたものを、受取人は適宜ディスプレイに表示させて、見たり読んだりすればよいし、プリントアウトすることもできる。それはまたフロッピーディスクやCD-ROMといった二次的な媒体にコピーして保存することもできる。電子媒体では、言うまでもなく、跡形もなく

消去でき、またたやすく複製を作ることができるという特色がある。

電子メール時代に至るまでの主役であった手紙は、往々にしてそこに書かれた内容以上のものを運ぶことが明らかである。書き手である差出人は、便箋や封筒を選び、インクを選び、文章やカリグラフィーにも注意を払い、ときには香を染みこませたり、花などの添え物をしたりして、郵便局や配送業者に託す。受取人は、その内容とともに、その内容が記されている支持体に差出人の感情、観念、意図などを濃密に感じるに違いない。トドロフの指摘を俟つまでもなく、《手紙は物的側面によって他の多くの記号（あるいはメッセージ）と大いに異なっているのである》⁽¹⁾そして何よりも、その《原物》が、長期的ないし短期的、場合によっては東の間、受け手の手元に保存されることになる。

フランスでは、交通手段としての馬車が広まり、全国に宿駅が整備されると、馬車は人や物資を運ぶだけでなく、郵便物も運ぶようになり、宿駅長の中には郵便局長を兼ねるようになった。それまでは貴族や商人、軍人や役人が私的公的にメッセンジャー *un messenger* を雇って運ばせていたものが、十七世紀の終わりには、街道沿いに整備された宿駅を財務官（郵便徴収請負人 *le fermier*）が管轄することになり、料金を支払えば郵便配達人 *un courrier* が遠く離れた土地に郵便物を運んでくれた。これによって手紙は身近なものとなり、一般的になった。

この十七世紀に、セヴィニエ侯爵夫人 *marquise de Sevigné* (1526-96) は、プロヴァンスの貴族と結婚した娘に四半世紀に涉って週に二度手紙を書き送ったことで有名である。一六二四年、ゲ・ド・バルザック *Guez de Balzac* (1597-1654) が外国から友人に宛てた手紙を公刊して注目を集め、優れた手紙が文学として認知されるようになった。この頃から、パスカルの『田舎人への手紙（レ・プロヴァンシャル）』（二六五六）に見られるように、手紙が個人の報告や見解を表明する手段ともなった。さらに、一六六九年には《ポルトガル尼僧の手紙》*les Lettres portugaises* なるものが発掘、刊行され評判になった。² このあと私的で内密であるはずの手紙でさえも公開されるようになっていった。

十八世紀にはそこから当然の成り行きとして書簡体が流行を見る。ヴォルテールの『英国書簡（哲学書簡）』（一七三三）やデイド

ロの『盲人に関する書簡』（一七四九）などの書簡の形式を借りた哲学的論考の刊行のほか、これは小説のジャンルにまで広まる。英国で、フランスで、そしてドイツにおいて、この時代の著名な小説のいくつかは書簡体である。³ このジャンルの流行は十九世紀のはじめまで続いた。これに手を染めなかった十九世紀の作家といえども、少なからず前世紀の書簡体小説の影響を免れなかった。

スタンダールの場合については、何よりもモンテスキューの『ペルシア人の手紙』（一七二二）の愛読者であり、ペルシア人がパリの風俗を故国に手紙で報告するというモンテスキューの手法を借りて、ドイツ士官がナポレオン支配後のイタリアの習俗を旅日記に書き留めるとい手法を『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』（一八一七）に採り入れた。そしてまた、かれが愛読した小説のひとつが、ラクロの書簡体小説『危険な関係』（一七八二）である。⁴ この作品は、手紙を使つての誘惑という恐るべき内容を、手紙の持つ報告と告白という二つの機能を用いて見事に描き出し、最後は保存された手紙がすべてを暴くという、まさに書簡体小説という以上に、『書簡をめぐる小説』である。この小説がスタンダールの小説に大きな影響を与えていることはまちがいないようだが、その影響関係を解きほぐした研究書に筆者はまだ出会っていない。⁵ しかし、スタンダールの小説において手紙などの《通信》*la correspondance* が頻繁に用いられていることについては、何らかの参考文献の指摘を俟つまでもなく、作品を丹念

に辿れば見えてくることである。まず、このスタンダールの小説の中心的登場人物たちのあいだでどのような《通信》が行われているかを見ておくことにする。

1 通信

スタンダールの小説における《通信》で何といつてもまず挙げなければならぬのは、『パルムの僧院』（二八三九）におけるファルネーゼ塔に閉じこめられたファブリスと、外部にいるクレリアとの連絡である。主人公のファブリス・デル・ドンゴは、旅回りの役者のジレッチと喧嘩をして死なせたことによつて、逮捕されこの塔に囚われの身となる。その独房でかれは、城塞長官の娘クレリアがすぐ目の下の建物屋上にある鳥屋に小鳥の世話をしにやってくることを知る。かれはこの娘と何かコミュニケーションを取ろうと、はじめは窓から顔を覗かせ自分の存在を知らせようとす。しかし、その窓に日よけが取り付けられてしまう。クレリアの方は、かれに姿を見られないように秘かに塔の窓を窺っていたが、日よけが取り付けられたことで、姿を現し、心配な表情でこれを見上げる。一方、ファブリスは日よけの板に穴を開け、次にはそれを掌の大きさに切り取つて小窓をあげ、そこからクレリアに合図を送る。はじめはファブリスの合図に動揺したクレリアも次第にかれにはつきりした関心を示すようになる。二人はか

つて一度馬車に同乗したことがあり、クレリアはかれについて取り沙汰されている噂も耳にしている。ファブリスは掌に暖炉の炭でアルファベットを一字一字書いては消して、彼女に想いを告白する。やがて、ファブリスが毒殺の危険に曝されていることを知ると、クレリアはオペラのレクタティーヴォ風に歌でそれを知らせる。さらに彼女はファブリスに指示して、肌着を裂いて紐を作らせたいえ、これを日よけの穴から垂らさせて、そこに綱とチョコレートやパン、さらには紙と鉛筆も結わえて与える。それらには短信 *un billet* も添えられている。ファブリスはまずこの紙と鉛筆を用いて手紙を記し、それを塔の下に並べてあるオレンジの木の入った植木箱のなかに降ろす。その内容は直接記されていないが、クレリアの書いた返信によると、恋の告白であることが明らかになる。このあとでは届けられた祈禱書のページを破いて、アルファベットの文字カードを作り、日よけの穴からそれをクレリアにかざして、かれは彼女との交信に成功する（第一九章）。

この二人の若者は、伝達の不可能を克服しながら、お互いに対する愛情を募らせていくのだが、ファブリスはアルファベットで自分の幸福を語り、彼女への愛を伝え、クレリアの方は父親から嫌な結婚を迫られていることもあって、自分を愛してくれるファブリスを恋しく思う。クレリアはやがて父親の城塞長官を裏切り、ファブリスの脱獄に手を貸すまでになる。

ファブリスとクレリアのカードによる通信に続いて、このあと

かれを何とか塔から救出しようという叔母ジーナ（サンゼヴェリーナ公爵夫人）の光による合図がある。ファブリスはある夜、遠くに明滅する光に気づき、それが自分に向けられた叔母の合図であることに気づく。この合図の方式は、アルファベット二十六文字の順番に応じて、その数だけ光を点滅させるというもので、現代ならさしずめ携帯電話でメールを送るときに、五〇音の三番目である「う」であればボタンを三度押すのと同じである。ファブリスも小窓からランプの光を明滅させ、こうして交信は成立する。しかし、この通信では、やがて省略記号も考案され、またアルファベットの順番をそのまま使用するのでは他人に気づかれる恐れがあるため、文字に与える明滅回数を変えることなども相談される。こうして塔のなかのファブリスと、かれを救出しようという叔母のあいだで、一種の暗号による通信が確立する（第二〇章）。

以上があまりによく知られた『パルム』におけるコミユニケーションの手段だが、ここには塔のなかに幽閉された主人公という特別な状況もあって、このような手段はスタンダールの他の小説には見られない。他では、通信手段はすべて手紙によるのである。

最初に出版された小説『アルマンズ』（二八二七）は王政復古下の青年貴族の憂悶を描いた作品であるが、その主人公のオクターヴは従妹のアルマンズを愛するようになり、アルマンズもかれを秘かに愛している。オクターヴはクレヴロシユとの決闘で怪我をしたとき、自分の場合によつたら死ぬかもしれないと思い、病床

でアルマンズに手紙を書いて愛情を告白する。このほとんど偶然の機会をはじめとして、お互いの気持ち次第に明らかになり、障碍を克服してやがて結婚へと話は展開していく。しかし、そうなるも常日頃から憂鬱そうなオクターヴはいちだんと不機嫌を募らせる。かれがその不機嫌の理由について決定的な告白ができないまま、二人はアンディイの館で、庭にあるオレンジの木の植木箱のなかを介して、他人に気づかれずに手紙をやりとりし、お互いの愛する気持ちを確かめあう（第十九章）。

二人は逢つて話すことができないわけではない。かれらは一緒に館の庭やそれに続く森への散歩を日課にしている。手紙は、対面しては口に出しにくい考え、もしくは言い尽くせない感情の告白を可能にする。

樹木を介して手紙を受け取る場面については、『アルマンズ』に先立って書かれた『エルネスチヌ』（二八二五頃執筆）という小さな物語のなかに見られる。伯父の老伯爵とドーフィネ地方の湖畔の城館に住む主人公の娘は、一人の狩人が湖の対岸にあるナラの木の洞に花束を入れるのを、城館の屋上から望見する。彼女エルネスチヌは、小鳥の世話をするために習慣的に屋上の鳥屋に上っているのだが、この狩人に関心を抱き、かれの様子を秘かに覗き見、また侍女と外出した際に、この洞の花束を見に行く。その花束には「イギリス風の書体で記された魅力的な手紙」が添えられていて、花束が目にとまるだろうかと記されている。

エルネスチーナはその花束と手紙から気持ちを引き離そうとするが、次第にその花束を置いて狩人に引かれていく。狩人はエルネスチーナを秘かに恋し、彼女が小鳥の世話に城館の屋上に現れることを知っていて、またそこから彼女に見られることを意識して、洞に花束と手紙を置いておくことは明らかなのだ。

ここでは手紙に花束を添えて、娘の目にふれるようにすると同時に、狩人は彼女に対する自分の愛情を強くアピールしようとしている。しかもそればかりか、エルネスチーナのためらう気持ちを知って、自分の不幸を哀れと思うなら花束のなかから白いバラを抜き取るようにと指示を与えたり、次には、そこから斑入りのツバキを取ってくれたら彼女の通う村の教会に出かけていくという条件を出したりして、彼女への一方的な伝達を相互的なコミュニケーションに変換しようという意味まで、この花束に託している。やがて、エルネスチーナは二つも置かれていた花束を喜んで持ち帰るようになり、手紙に記された恋の告白に、不安を感じながらも有頂天になる。彼女にとっては「もはや手紙の優雅な書体などは問題ではなくなつて」いる。

この「恋の誕生」という副題をもつ物語では、エルネスチーナを恋する人物が、デイサン夫人との関係が噂されているフィリップ・アステサンという中年の男性であったことから彼女の悩みが深刻になるのだが、手紙と花束がもとになり、彼女のなかに恋が誕生する有様が悉に辿られていく。この物語はスタンダールが

『恋愛論』（一八二〇）で展開した「恋の誕生」の理論の応用編になつてゐることで知られてゐる。⁸⁾

さて、『アルマンス』における同じ館のなかでの手紙のやりとりは、『赤と黒』（一八三二）のなかでも繰り返される。ピラルル神父の紹介で、パリに出てラ・モール侯爵邸に秘書として住み込んだ主人公のジュリヤン・ソレルは、侯爵令嬢のマチルドと恋仲になるのだが、その発端は、マチルドが軟弱な青年貴族に較べてエネルギーにあふれたジュリヤンに心を奪われ、自分との身分の違いに悩むものの、父親の従者を通じてジュリヤンに手紙を届けさせることから始まる。手紙は「気取らぬ文体」で、ここでも「きれいなイギリス風の書体」で書かれている。手紙を受け取ったジュリヤンは、自分が貴族たちのからかいの対象になつてゐるのではないかと疑うが、図書室に入ってきたマチルドにそうしたことを記した返事を手渡す。このあとさらにマチルドが手紙を図書室のジュリヤンに「投げつけて」といくと、ジュリヤンはマチルドの手紙好きに驚き、手紙のやりとりで「書簡体小説ができてしまふ」などと冗談めかして考える。こうして三通目の手紙で、マチルドは恋を告白し、部屋に忍んでくるようにという大胆な誘いを書いてくる。疑い深いジュリヤンはマチルドからの手紙を、自分に何かあったときに公表するように記した手紙を添えて、小包にして友人のフーケのもとに預ける（第二巻第一章）。

『赤と黒』の場合は、館のなかでジュリヤンとマチルドは使用人

と侯爵令嬢という資格で自由に逢える状況であるにもかかわらず、手紙を交換しあうことによって二人を一挙に近づけ、恋人同士に変える。マチルドは「書いたものは残る」ことを熟知しているにもかかわらず、自分の気持ちをストレートに手みぢかに表明するために手紙を書き、またそれがジュリヤンとの身分の違いを乗り越える「英雄的な行為」であると考えている。面と向かえば、お互いの身分のちがいが露わになるところを、手紙はそれを緩和させる側面がある。

以上見たように、スタンタールの小説においては、主人公たちの恋愛において、通信が重要な役割をもっているが、とりわけ手紙の役割は大きい。

2 手紙

恋の進展や成就に寄与する手紙をあと二例ほど見てみる。

そのひとつは『カストロの尼』（一八三九）の主人公たち、山賊（ブリガンテ）の息子ジュリオ・ブランチフォルテ Jules Branciforte とアルバの豪族の娘エレナ・ダ・カンピレアーリ Hélène de Campireali の場合である。ジュリオは、尼僧院で教育を受けて町に戻ってきたエレナを見かけて夢中になり、彼女もジュリオのそうした自分への思いを噂で知っている。ある夜、ジュリオは自分の気持ちを記した手紙をエレナに受け取らせるために、館の地上

五〇ビエ（約十五メートル）のところにある彼女の部屋の窓辺に、つなぎ合わせた長い竿の先に括りつけた花束に手紙をつけて差し出し、恋を告白する。そしてここでも、エレナがかれを蔑んでいないなら、花束から花を一本抜き取って窓下に投げるようにとジュリオは指示している。二人はこれをはじめとして、夜の決まった時間に、館の窓の離れた内そとで逢い引きをし、ジュリオは同じ方法で手紙を届ける。しかしこの逢引きはまもなくエレナの父親の知るところとなり、エレナは教会に出かけた際に、ジュリオの傍を通り危険を知らせる書き付け（メモ）を落とす。しかし障碍はかれらの気持ちを近づけることにしかならない。

ここでは手紙に花束を添えるという方法や、館の高い窓とその窓下の離れた場所で恋人たちが出逢うという設定が繰り返されている。

しかし『リュシヤン・ルーヴェン』（一八三四執筆手、未完）では少し異なる。ナンシーの町の社交界で夫亡きあと貞淑の評判が高いシヤステレル夫人に関心を抱く連隊の槍騎兵少尉リュシヤンは、彼女のかれを遇する態度を考え、その気持ちを測りかねて複雑な思いを抱いているが、ついに美しい夫人に引かれる自分の気持ちに抗しきれずに手紙を書く。かれはその手紙をナンシーから六リユー（約二四キロ）も離れた町ダルネーに行つて投函する。これには、地元のナンシーで投函すれば夫人に禍が及ぶかもしれないという配慮があったと思われる。夫人の方は、やはりリ

ユシヤンに心を引かれているものの、小さな都市の社交界で噂にのぼることを恐れて、返事をためらっている。しかし三通目が届くと、「非難すべきは、手紙を出すことで、それを書くことではない」という奇妙な理屈で筆をとる。スタンダールは、イエズス会の学校で習った他人を欺くやり方で彼女が自身を欺いていると付け加えている。結局、手紙を書き終えてしまうと、夫人は嬉々として召使いにそれを投函させに行かせる。そのおもて書きには、ダルネーの局留めでリュシヤンの使用人の名前が書かれているが、それはかれの指定した宛名である。手紙で夫人はリュシヤンをたしなめ、かれに無駄な希望をあきらめるように説得する。リュシヤンはその内容よりも予期せず返事をもらえたことに狂喜し、郵便局でそれを受け取るとただちにありあわせの紙に返事を書いて、郵便を運ぶ馬車に間に合うように急いで投函する。かれは投函したその手紙の出来がよくなかったことを気にして、それを取り戻そうとするが、今度は間に合わず、さらに次つぎと二通の手紙を白い紙に入念に書き記す。夫人は夫人で、返事を出したことを後悔するが、リュシヤンの最初の急いだ返事にむしろ用心を解いて幸福に身を委ねそうになる。しかし七枚にも渉る三通目の手紙に腹を立て、あてのない文通を続けないようにという内容の四行の冷たい手紙を返す。夫人は、これ以上に手紙がきたら、開封しないで返送しようと考えるが、一方でそんな自分に苛々していることを意識する（第一部第二二―二三章）。

この小説においては、手紙では事態が急速に進展しないが、リュシヤンは夫人を文通に巻き込み、シヤステレル夫人の気持ちがりユシヤンに引きつけられていく様子が書かれている。彼女はあとで、冷淡な自分の手紙が真意ではないとかれに告白し、またかれの手紙のなかの冷たい調子を咎めたりする。かれは夫人から明確な言葉を引き出すに至らないが、この手紙のやりとりを契機に、二人のなかでは想い合う気持ちが高まっていく。シヤステレル夫人のなかの抑えられた思慕の念は、彼女が熱を出して病床につくとという事態になり、愛する人の病気を知ったリュシヤンは再びダルネーから手紙を出す、その手紙はリュシヤンをシヤステレル夫人から遠ざけようとたくらむデュ・ポワリエ医師の指示で取り上げられてしまい、彼女の元に届かない。ここには、シヤステレル夫人とリュシヤンとの関係の進展のむずかしさが暗示されている。リュシヤンが夫人を誤解して、失意のうちにパリに戻ったあと、事情を知らない夫人は、パリからの手紙をあてどなく待つことになるのである。

手紙は恋人たちのあいだだけでなく、父母と娘ないし息子のあいだでも交わされる。『赤と黒』でマチルドは、ジュリヤンの子供を妊娠したことを父のラ・モール侯爵に手紙で打ち明け、父親もその怒りを手紙で伝え、そのあと、二人のあいだで、ジュリヤンの処遇を巡って手紙の往復がある（第二卷第三二―三五章）。ここでは面と向かつては告白し難い事態に陥った娘と、感情の激発を

恐れる父親のあいだで、手紙という手段が用いられている。またこれとは異なり、『ルーヴェン』においては、フランソワ・ルーヴェンはナンシーにいる息子リュシヤンに、かれを氣遣う短信を送ってくるし（第一部第七章）、参事院請願委員となってノルマンディのカーンに派遣され政争に巻き込まれた息子に、母親はすべてを放って帰ってくるようにという手紙を、配達人を使って送ってくる（草稿第四卷）。こちらの小説では、離れた土地にいる息子への両親の愛情が、それとなく挿入されている。

手紙は、こうした主要登場人物のあいだでやりとりされるだけでなく、スタンダールの小説中では手紙が飛び交っていると一言でも言い過ぎではないだろう。

『ルーヴェン』の第二部においては、バスノルマンディで政府に反対する代議士の選挙妨害の任務を負わされたリュシヤンは、パリの大臣や政府関係者とのあいだで、手紙のやりとりを頻繁に行ない、ときには《電信》une dépêche télégraphique による連絡を受ける。まさに《通信》が物語を進行させている。また、パリに戻ったリュシヤンは、内務大臣ヴェーズ伯爵のもとで働くことになるが、公的な手紙に工作するといったことをしている。かれはフォリ將軍に好意を抱いているが、内務大臣から陸軍大臣に提出する書類のなかに、將軍を中傷する大臣の報告書があるのを知る。書類はすでに陸軍大臣まで回っているのだが、かれは内務大臣が削除したはずのものが紛れ込んだと称して、軍事警察局長に

それを探させ、そのなかから一枚を抜き取り、文章を改ざんして繋げることをする（草稿第四卷）。また、代議士のデ・ラミエは、トゥルトの兄弟がかれの選挙妨害をしたという理由で、間接税局長のトゥルトを免職にさせようと画策するが、リュシヤンはその理不尽な進言を記した財務大臣宛書類を見つけ、器用な書記に名前をすべてタルトに書き直させる。当然対象者が見つからず戻ってくる。内務大臣は訂正の添え書きを加えて、再度発送しようとするが、リュシヤンはそれを盗み、今度は宛先を故意に財務大臣から陸軍大臣に変えて、結局書類を半年も宙ぶらりんにする（同）。これらは公用の手紙だが、かれは改ざんしたり盗んだりして、それら私怨に基づく手紙の目的を妨害する。

また、リュシヤンの私生活では、父親の配慮からパリいちばんの才色兼備のグランデ夫人のサロンに出入りさせられ、夫人から好感を持たれ、夫人はリュシヤンの来訪を待ち望むようになるが、ある時、夫人はいくら待っていてもかれが現れないので手紙を書くこうとする。「最初に自分から手紙を書く」ことに長時間悩んだ末、夫にかこつけてかれに来るように手紙を出す。しかし、かれが来る代わりに手紙をよこしたために、彼女は憤り、それでもかれがあとで来たときに「手紙が開封されていないのを見た方がいい。」などと考える。結局、彼女は手紙を開封し、急用のために来訪できないというリュシヤンの冷淡な文面を読んですっかり逆上する。彼女は自分からリュシヤンの役所に出かけ、かれに会うと、最後

には自尊心をかなぐり捨てて、恋に燃える女になってしまふ。リユシヤンの方は、シャステレル夫人を相変わらず想っていて、グランデ夫人のことは眼中にない(同)。

主要人物たちの私的な手紙は、手紙を書かなくては意思の疎通ができない離れた距離にいる場合だけではない。つまり今まで見てきたように、そこでは心理的な距離を乗り越えることが問題である。同じ家、同じ町にいながらも手紙は介在する。現実的に離れた場所、牢獄や修道院といった連絡不可能な場所を結ぶ手紙は、次のような例を見ておけば充分かもしれない。

ファルネーゼ塔については触れたが、『カストロ』では、父親によって女子修道院に閉じこめられたエレナに、ジュリオは手紙で届ける手段を探り、修道院の食料購入係の尼僧が商人と関係を持つていることを突き止めて、その商人を通じてエレナと手紙のやりとりをする。そのあとではジュリオは修道院の庭に忍び込み、鉄格子越しに逢い引きをするという冒険までする(第四章)。またこれとは反対のケースとして、『赤と黒』では、ヴェリエールの町を出て神学校に入ったジュリヤンのもとに、かつての恋人レナール夫人は、わざわざヴェリエールとは隔たったディジョンまで出かけて、そこから手紙を送り続けるが、それは神学校長のピラール神父によって開封され、暖炉にくべられて、ジュリヤンの手元には届かない。その手紙はテキストが示されていないが、「このうえなく穏当な文章であるにもかかわらず、もつとも激しい情熱が

顔をのぞかせている」。そしてある日ピラール神父は、永久の別れを記す「涙でなかば消えかけた」夫人の手紙を読む(第一巻二六章)。レナール夫人は、その手紙でも返事を期待していた様子が見られるが、ピラール神父の断固とした措置が二人のあいだを遠ざけてしまふ。

当然のこととも言えるが、困難を乗り越えて手紙をやりとりできる時には、恋人たちの関係は進展するが、手紙が途絶するとそれで関係は停滞したり終焉を迎えたりする。

3 偽手紙

手紙のやりとりは、手紙を出さなかつたり届かなかつたりすること、当事者たちのあいだにあらたな感情を惹起し、時には関係を終わらせる。手紙が善意であるにせよ悪意であるにせよ、奪われ妨害されることで、発信者と受信者のあいだに齟齬を生じさせる。また、こうした齟齬は、偽の手紙を介在させることでも発生する。

偽手紙とは第一に匿名の手紙、つまり事実を偽った内容の、発信人を秘したり偽つたりした手紙を指すと定義できよう。しかし第二に、匿名ではないが、記述する事柄が偽りであつたり故意の言い落としがあつたりする手紙も偽手紙である。そしてさらには第三に、匿名であるなしかかわらず、言わずもがなのことをわ

ざわざ書き、第三者を陥れるための悪意を持ったいわば密告の手紙も、第二のものと裏返し、偽手紙に近い位置にあると言えるだろう。手紙が頻繁にやりとりされるところでは、これらの偽手紙が介在する余地が大きいと言える。

スタンダールの小説のなかで、偽手紙が主人公たちの関係を打ち壊し、物語を終わらせてしまうものといえ、第一に『アルマンス』が想起される(第二章―三三章)。この小説では、すでに記したように、主人公たちは館の庭にあるオレンジの木の植木箱のなかを手紙の受け渡し場所にして文通している。それが召使いの密告で、二人の結婚を妨害したいと思っているコマンドゥール・スービラーヌに知られてしまう。スービラーヌははじめ手紙を《盗み読む》ことしか考えていないが、甥のシュヴァリエ・ボニヴェの巧みな誘導で、偽手紙を作り、二人の仲を裂くことを画策する。かれは手紙の文案を作成すると、かれの妹のボニヴェ夫人のところに来たアルマンスの手紙を盗みだし、「筆跡の模倣を専門とする業者」*un calqueur d'autographe* へ持って行く。かれはアルマンスが親友のメリー・ド・テルサンと文通していることを知っていて、アルマンスが親友に宛てた手紙の体裁で、これをオレンジの木の植木箱にしよせせる。そこには、オクターヴがあまり面白くない人間であり、かれとの結婚が「義務でしかない」と記されている。オクターヴが、アルマンスに自分の重大な秘密を手紙で告白しようと、その告白を記した手紙を件のオレンジの木の

箱に置きに行き、アルマンスの手紙(偽手紙)を見つける。そして、そのメリー・ド・テルサンに宛てられた手紙を読んで、自分と結婚するアルマンスの《真意》を知り、絶望する。かれは自分の手紙を持ち帰り、この《真意》を確認することもなく、彼女と結婚し、そのあと独り乗船して、死に向かって旅立つ。かれは遺言を認めると同時に、アルマンスに手紙を書き、そこに彼女のメリー・ド・テルサン宛の手紙(つまりスービラーヌの偽手紙)を同封する。

この偽手紙制作の場で、スービラーヌとシュヴァリエ・ボニヴェがコデルロス・ド・ラクロを話題にしているのは注目される。ボニヴェが『危険な関係』の著者を弁護するのに対して、スービラーヌは、ラクロが「うぬぼれや」で、その作中人物は「かつら師のように手紙を書く」と手厳しい。スタンダールの意見はどのあたりにあるのかここでは不明だが、この偽手紙の場面でラクロの書簡体小説を意識していたのは明らかであろう。

さて『カストロ』では、偽手紙はエレナ・ダ・カンビレアーリの母ヴィットリア *Victoire* によって作成され、娘に届けられることになる。

娘のエレナはジュリオ・ブランチフォルテと秘密に結婚していると誤解され、父親によってカストロの女子修道院に閉じこめられている。それを突き止めたジュリオが彼女に手紙を書き、ついには逢い引きをするようになったことはすでに記した。ジュリオ

はエレナを修道院から連れ出すために計略を立てる。しかし、女子修道院襲撃という荒っぽい手段は失敗し重傷を負う。かれは指名手配となりナポリ王国に逃れて行く。エレナは金を注ぎ込んでジュリオの所在を探らせ、かれに宛てた手紙を届けさせようとす
 るが、この探索は徒労に終わる。エレナの母は、娘が片時も恋人のことを忘れず、物思いに耽っているのに業を煮やして、ジュリオたちの総帥であるコロナ公に手を回して、ジュリオをスペインに体よく追い払う。ジュリオはスペインからコロナ公を仲立ちにしてエレナ宛に手紙を書くが、コロナ公はそれらをすべて焼き捨てる。エレナの母親は娘の気持ちにジュリオから少しも離れないので、娘にジュリオの筆跡を真似た偽手紙を送り続け、七八通送ったあと、最後に愛情が冷めたと伝える。「それはまさしくジュリオの筆跡であったし、彼女はこうえなく綿密に調べてみた」のであった。こうして絶望したエレナは母親に頼み、金を積んで尼僧院長の地位を手に入れさせ、彼女にのぼせあがった司教を愛人にするという運命を辿る(第六章)。このあとジュリオが帰国し、自分の帰国がエレナの耳に入るように画策し、彼女は真相を知るのだが、彼女は「嘘と偽りで塗り固められた」自分の生涯に結末をつけるために、ジュリオに長い手紙を書き、それをかれの使いのウゴーネに託してから自殺する。

以上、偽手紙が主人公たちの運命を破局に導き、物語を終わらせる例であるが、『バルム』では、偽手紙が大きな転換点になって

いる。ファブリスのジレットチ殺しは政争に利用されるが、サンセヴェリーナ公爵夫人と対立するラヴェルシ侯爵夫人は、国外に逃走したファブリスを逮捕させるために、サンセヴェリーナ夫人の筆跡を真似た偽手紙を作らせ、かれをおびきだす(第二四章)。ラヴェルシ夫人は、サンセヴェリーナ夫人からもらった手紙を保存して、それを手本に「サンセヴェリーナ公爵夫人の筆跡をうまく真似して書ける」という元公証人のジェノヴァの懲役囚に、一通の手紙のコピーを依頼する。そして、仲間ファブリスの潜伏先を探索させ、かれのもとにメッセンジャーを使って手紙を届けさせる。ファブリスは叔母のジーナに再会できる喜びに有頂天になり、従僕が忠告するのも聞き入れずに出発してしまう。

この事件には伏線があつて、スタンダールはモスカ伯爵の言葉として、侯爵夫人の一派が匿名の手紙などを作るのがいかにたやすいかを、この出来事に先立つ第一〇章で書いている。また一章では、用心深いファブリスは叔母のジーナへ自分の引き起こした事件を知らせる手紙を、御者のロドヴィーコに口述筆記して、その手紙にAとBの記号を付け、別の紙に自筆で「AとBを信じよ」と書いて、手紙が奪われたときに備えながら、その手紙が本物であることを保証するといったことをしている。しかし、用心の隙についてファブリスは罠に嵌る。その結果かれは捕らわれ、前述のファルネーゼ塔に監禁されることになる。

小説は、主人公がクレリアと塔の内そとで再会するところで、

二人の恋愛が物語の中心であることが明らかになってくる。つまり、それまでファブリスを中心に多様な出来事が描かれてきた小説が、ひとつの核に収斂されるきっかけを偽手紙は作り出す。

『パルム』においても、まさに手紙が錯綜しているが、陰謀の渦巻く宮廷では偽手紙も不自然ではない。パルム大公はサンセヴェリーナ公爵夫人が自分の思い通りにならなかったことから、匿名で夫人の愛人であるモスカ伯爵に、夫人が甥のファブリスと恋愛関係にあるようだという密告の手紙を、カルローネという近衛兵に書きとらせ、郵送する。伯爵はそれが大公の仕業であることを見破るものの、疑惑を煽られて嫉妬に苦しむ（第七章）。

この場合と類似の密告の手紙は、『赤と黒』にも見られる。家庭教師のジュリヤン・ソレルはレナール夫人を誘惑し、二人は道ならぬ恋に陥るが、レナール氏のもとにそれを密告する匿名の手紙が来る。それはジュリヤンに想いをはねつけられ、かれを恨みに思う女中のエリザが、レナール夫人に横恋慕するヴァルノに二人の関係を告げ口したことから、ヴァルノが仕組んだ密告だった。レナール氏はその手紙を読んで真つ青になり、苦惱を鎮めることができない（第一巻第十九章）。

レナール氏が居間で「みず色の便箋」の手紙を読んで顔色が変わる様子から、ジュリヤンは素早くその手紙が何であるかを察知し、レナール夫人に告げる。夫人は翌朝料理女に託してかれのところに本を届けさせるが、そこには長い手紙が挟んである。彼女

は夫の疑惑を逸らす手だてを書き、匿名の手紙が自分のところにもきたことにしようと、ジュリヤンに次のように記す。

「あなたが匿名の手紙を作ったに渡してください。缺と同時に忍耐も必要よ。次のような単語を本から切り抜いて、お渡しするみず色の紙に糊で貼り付けてください。これはヴァルノさんから貰った紙です。あなたの部屋が調べられることを考えて、切り抜きに使った本は燃やしてください。お眺めの単語が見つからなかったら、根気よく一字一字繋ぎ合わせるようにしてください」（第一巻第二〇章）

この手紙にはレナール夫人が作った匿名の手紙の原稿が同封されていて、そこには、夫人の行動はお見通しなので自分の言いなりになるしかない、というある種の脅迫が記されている。ジュリヤンはレナール夫人の冷静さに驚きながら、夫人の原稿にしたがって単語を貼り付けた手紙を作り、作り終えるとそれを夫人に手渡すが、この偽手紙の共同制作という共犯関係はかれらの仲をさらに緊密にする。

同じ差出人不明の密告の手紙でも、モスカ伯爵への手紙はまったくの事実無根であるが、レナール氏への手紙が述べていることは事実である。恋人たちはこの事実を隠蔽するために、この手紙に対抗する偽手紙を作成するという手段をとる。

同様に、自分に宛てて偽手紙を書く例が『エルネスチヌ』のなかにも見られる。フィリップ・アステザンは情人のデイサン夫

人に偽手紙を示して、叔父が病気でブルゴーニユに行かなければならないと言つて、彼女から離れ、実際は森の藪に潜んで秘かに想っているエルネスチーナの様子を窺いに行く。

同じ偽手紙でも、未完の小説『ラミエル』（一八三九年執筆着手）においては、主人公のラミエルは、でたためめの身の上話を、伯父のボンニア氏と称する架空の人物に宛てた手紙に書いておき、筆筒のなかに保存している。これに基づいて、パリのホテルの女主人であるル・グラン夫人などに身の上を話す。手紙に書いておくのは、ともすると本当のことを言ってしまう自分に対する警戒からなのだが、自分を見せかけるために、単なるメモ書きでなく、手紙という手の込んだ台本を用意しているところに、知能犯的なところがあつた（第一章）。

『赤と黒』においては、虚偽の感情を受取人にほんとうのように思わせる『偽りの手紙』が存在する。それがジュリヤンの書くフェルヴァック元帥夫人宛の恋文である。ジュリヤンは侯爵令嬢のマチルドと愛し合うようになるが、誇り高いマチルドは、ジュリヤンに肉体を与えたことで自分が支配されることを恐れ、かれに対して冷たい態度をとる。ジュリヤンはストラスブルにラ・モール侯爵の使いとして赴いた折、かつて知り会ったコラゾフ公爵という人物と再会して、かれに事情を話し、マチルドを引き止める手段を伝授される。つまり、別な女性を愛するふりをして、その女性に恋文を出し、本命の女性の気を引こうというのだ。コラ

ゾフはかれに、「出す順序と注意書きのついた五三通の恋文見本」を渡す（第二巻二四章）。ジュリヤンはパリに戻ると貞淑で評判のフェルヴァック元帥夫人と出会い、この女性を標的にし、彼女と交際する。かれはまず「道徳讚美の美辞麗句を並べた死ぬほど退屈な偽善の手紙」を書き写して、彼女に届ける。こうして返事のないまま、しかし夫人から迷惑がられる様子もなく、かれは彼女に「恋いこがれている」という手紙を出し続ける。かれがうわの空で原文を変えずにそのままに写した地名のことで、夫人から訊ねられ、かれは夫人が手紙を読んでいることを知らされる。フェルヴァック夫人ははじめジュリヤンの手紙を意に介さないが、次第に興味を覚える。ただ、「かれが侯爵の秘書でしかない」ことに悩む。しかし、ある日、ジュリヤンから手紙がきていないために、自分から手紙を出してみる気持ちになり、それが楽しくなる。彼女はそれとでは、ジュリヤンにかれの宛名を記した封筒を要求する（第二巻二六章―三〇章）。

こうしてジュリヤンとフェルヴァック夫人との文通がはじまるが、マチルドはジュリヤンのもとに門番が頻繁に手紙を届けにくるのを見て、次第に苛立ちを覚える。こうしてある朝、我慢しきれなくなつて、門番から手紙を受け取ったジュリヤンのもとに行き、かれの目の前で机の引き出しを開け、そこに「封も切らずに」八、九通の手紙が入っているのを見つける。彼女は開封して、何枚もの便箋に書かれた、フェルヴァック夫人の筆跡の手紙を目に

する。

ここでは手紙は内容が問題ではない。愛する女性の嫉妬心をかきたるための道具でしかなく、文通そのものに、つまり文通していることを見せびらかすことに、意味がある。フェルヴァツク夫人にしてみれば、ジュリヤンに利用されただけで、「悪いこれがれている」という虚偽の文言に踊らされていたわけである。

『赤と黒』においては、手紙は主人公ジュリヤンの失墜に大きな役割が与えられている。かれがバリでラ・モール侯爵令嬢マチルドを誘惑し、まさに彼女と結婚して貴族社会に入ろうとしている瞬間に、かつての愛人レナール夫人は、侯爵宛てに手紙を送り、ジュリヤンの過去を暴く。この手紙はジュリヤンの野心を打ち砕き、こうした手紙に逆上した(?)ジュリヤンをレナール夫人狙撃に向かわせ、かれ自身を破滅させることになるが、これはまた物語を終焉に導く。

レナール夫人にこの手紙を書かせるに至ったそもそものは、ジュリヤンがラ・モール侯爵にかれの身元をレナール夫人へ問い合わせたところにあるのだが、ジュリヤンは、かつての恋人が好意的な手紙を寄せて、侯爵にかれの身元を保証すると考えたのである。そう推測するしかない。侯爵がどういふ風に夫人に訊ねたのかは記されていない。しかし夫人は「おそろしく長い手紙を、念を入れて」書いてきて、それは「涙でなかば消えかけている」のであるが、「偽善の助けを借りて、一人の不幸な女を誘惑して、

出世を計った」と、私情を殺して「義務の観念」から書き記している(第二巻三十五章)。そこには悪意さえ見られるようである。

しかし、この手紙については、のちに傷が癒えて、ジュリヤンの収監されている牢獄にやってきたレナール夫人によれば、告解の司祭の若い僧侶が書いたものを、夫人が書き写したものだと言う(夫人の原稿に基づいてジュリヤンが本の単語を切り抜いて手紙を作ったように)。しかも、司祭の書いたものを夫人は写しながら「手加減を加えた」とも付け加える。ジュリヤンがヴェリエールを去ったのち、罪の意識から信心に凝り固まった夫人の心を支配していたのは告解の司祭であり、司祭は夫人の告白を聴いては指導を与えていたのであった。ジュリヤンと再会した夫人は、手紙が原因となってジュリヤンを狙撃にまで走らせた自分の罪の恐ろしさを、しみじみと後悔している。つまり、心を宗教に占領され、手紙が本心からのものではなかったことが明らかになる。ここにはおそらく、人間の魂をあの世界においてばかりかこの世でも思い通りにしようとするイェズス会のやり方に対する作者の批判が込められている。

『赤と黒』を大団円に導くレナール夫人のラ・モール侯爵への手紙は、夫人の《真意》を無視した者の文章を、夫人が書き写したにすぎない一種の偽手紙であったと言うことができよう。それは恋文見本を写してはフェルヴァツク夫人に送り続けたジュリヤンの偽手紙と通じるところがある。

4 手紙の機能

以上見てきたようにスタンダールの小説では、偽手紙を含めた数々の手紙が書かれて、登場人物のあいだを往復する。しかし書簡体小説の手紙のように、手紙そのものの本文（テキスト）を挿入する場合はそれほど多くはない。まずその点を検証してみたい。

はじめに、最初の小説『アルマンス』ではどうかであろうか。ここでは、クレヴロシウ侯爵との決闘で怪我をして、自分が死ぬのではないかと思つたオクターヴがアルマンスに宛てた愛を打ち明ける手紙（第二章）、オレンジの木を植わった箱を介してアルマンスがオクターヴに宛てた恋文（第二十九章）、コマンドゥール・スーピラーヌがメリー・ド・テルサン嬢を騙つて書いた偽手紙（第三〇章）、それに決闘に先立つてクレヴロシウがオクターヴを挑発する手紙の四通だけが、手紙のテキストとして示されている。はじめの三通が、恋人たちを実質的に結びつけるものと、そしてまた切り離すものである要の手紙である。オリーヴの木の植わった庭の木箱を介して、二人のあいだでやりとりされる手紙は、このアルマンスの最初の恋文以外は、オクターヴが「天使のような善意に満ちた手紙を何通か受け取った」と書かれているものの、その手紙のテキストは示されていないし、その内容についても細かい点は報告されていない。

『赤と黒』においては、第一巻では少数であるが、それでも後半の方に固まって四通の手紙がある。つまり、すでに見た、偽手紙のための原稿を同封しての、レナール夫人からジュリヤンに宛てた手紙（第二〇章）を筆頭に、シヨランからラ・モール侯爵への役職を求める手紙（第十九章）、シェラン神父から神学校長ピラール神父に宛てたジュリヤンの紹介状（第二十五章）、そしてラ・モール侯爵からピラール神父宛のパリへの招請状（第十九章）である。

ここで内容的に重要性をもつものは勿論最初のものである。第二巻にいくと、まず、マチルドがジュリヤンに部屋へ忍んでくるようにと誘う彼女の三番目の手紙（第四章）と、マチルドからの手紙を同封してジュリヤンが友人のフーケに送る手紙（第五章）がある。そして第二巻の後半に入ると、ジュリヤンと重大な事態に陥つたマチルドと、父親の侯爵とのあいだに交わされる三通の手紙（第三一、三四章）、および侯爵からジュリヤンへの手紙（第三四章）、そして第三五章では、ジュリヤンが書くシェラン神父への手紙、緊急を告げるマチルドからジュリヤンに宛てられた手紙、そしてマチルドがジュリヤンに見せる父侯爵のもとにきたレナール夫人の長文の手紙がある。このあとになると、レナール夫人を狙撃して逮捕されたジュリヤンがマチルドに書く手紙（第三六章）とレナール夫人が三六名の陪審員にジュリヤンの助命を求める手紙（第四〇章）しかない。つまり、マチルドの妊娠という事態に端を発する、ラ・モール侯爵邸におけるジュリヤンの勝利と失墜

の進行が、第二章から第三章にかけて、手紙の本文（テキスト）を次つぎと提示することで実に簡潔に描かれている。マチルドと父侯爵のやりとりにしても、手紙でなければ、かなりの間延びした場面となったところだろう。

『パルム』においては、手紙のテキストが示されるのは、『赤と黒』よりも六〇パーセントも多い二五通にのぼる。そのうち牢獄に囚われているファブリスにクレリアが渡す手紙は五通ある（第一章（二一章）。そこには、いつ暗殺されるか分からない牢獄のファブリスに対するクレリアの心配が表れている。またジーナ（サンセヴェリーナ夫人）が甥に宛てた手紙は、物語全体を通じて五通ある。その一通は、ファブリスの囚われているファルネーゼ塔の独房に、日よけの付いた窓越しに投げ込まれた鉄の玉のなかに仕込まれた長文の手紙であり、脱獄の手順が細かく書かれている（第二〇章）。このように主人公ファブリスを愛する二人の女性の手紙が圧倒的である。他にパルム大公が匿名で出したモスカ伯爵宛の偽手紙（第七章）や、サンセヴェリーナ夫人の名を騙ったラヴェルシ侯爵夫人のファブリス宛の偽手紙もテキストで提示されている（第四章）。それから、サンセヴェリーナ夫人からモスカ伯爵へは二通（第一章、二七章）そしてモスカからサンセヴェリーナへも二通（第二章、二四章）の手紙が挿入されている。これらのうちモスカ伯爵のあとのものは、夫人が以前侍女として使っていた女の名で仕事を求める手紙を装い、同封した古書の紙片

の印刷した部分が、書物の内容に似せて印刷屋に作らせた手紙の本文になっているという奇妙なものである。『パルム』全体では、サンセヴェリーナ公爵夫人の手紙は八通で一番多く、これに対して、ファブリスの手紙は三通しか本文が示されていない。

『カストロ』においては、中編ということもあって、手紙がテキストで示されているのは短信も含めて一通でしかないが、ほとんどがジュリオとエレナの恋人たちの交わす手紙である。わずかに二通が、エレナから母親のヴィットリアに宛てた修道院長の地位を買ってはほしいと懇願する手紙（第六章）、およびエレナを妊娠させた司教のフランチェスコ・チッタデーニが保身を計るために秘密を守るよう求めてエレナに宛てた手紙（第七章）である。

未完作品の『ルーヴェン』では、テキストが示されている手紙の大部分（一二通）が、役人となったリュシヤンと内務大臣や知事とのあいだの仕事上の手紙である。それ以外は、第一部でナンシーの兵営に入ったかれが、仲間から脅迫される手紙が二通（第六章）、マレール・ド・サン＝メグラン大佐によって二四時間の謹慎を命じられる手紙（第七章）と、父のフランソワ・ルーヴェンの手紙（同）とが提示される。父の手紙は、第二部でも二行の短信が示される（第四六章）し、草稿第四巻には、母親の手紙もテキストで掲げられている。草稿第五巻には、先に触れたグランデ夫人との往復の手紙が本文で示されている。肝心のリュシヤンとシヤステレル夫人のあいだのものは、手紙の文章そのものでは

示されていない。

少し煩瑣になったが、以上のように、スタンダールの小説ではたくさん手紙が飛び交っているにもかかわらず、その割には手紙の文章そのものが物語中に挿入されることは少ない。また手紙の文章が示されているから、物語に重要で不可欠なものであるかといえ、必ずしもそうとは言えない。それは上に挙げた手紙がどんなものかを見てみれば明白であろう。これら引用された手紙とは対象的に、手紙を書いたとは記されるものの、内容ですら明らかでないものがある。内容はともかく、手紙は出されたり、受け取られたりすること自体でまず意味をもつが、そこに重要性を置いている場合がある。また、受け取って開封するか開封しないかも重要である。スタンダールの小説の登場人物は、これまで見てきたように、見知らぬ相手に手紙を受け取らせることに腐心する。そのために好意を示す相手には花束を添え（ジュリオ、アステザン）、偽手紙では、時によっては、他人の名を騙る。しかしながら、手紙が何かしらの原因で届かないと、当事者の関係が途絶したり、中断したりする。手紙は奪われることもあるが（デュ・ポワリエ医師によるリュシヤンのシャステレル夫人宛、ピラール神父によるレナール夫人のジュリヤン宛、コロナ公によるジュリオのエレナ宛のもの）、物理的に到達不可能なこともある（ジュリオと修道院のなかにいるエレナ）。また、すでに悉に見たように、偽手紙によって妨害を受ける場面も出てくる。しかし、これ

らの重要な手紙がテキストで示されているとは限らず、内容が簡潔に叙述されたり、手紙を出したり受けとったりの実事が記されるだけのことも多い。

書簡体小説は、当然のことながら、交わされる手紙の内容そのもので物語が辿られていくが、ラクロの『危険な関係』では、とりわけ手紙のもつ機能に着目される。主人公のヴァルモン子爵は、手紙を受け取らせること、受取人に手紙を読ませることに策を巡らし、また、受取人が手紙をどう扱うか、保存するか棄てるかを見極め、自分の介入の余地を探る。そしてヴァルモンの場合、手紙を仲介したり、盗み読んだり、偽手紙を出したりすることによって、他人を自分の意のままに支配しようとする。そうした手紙のもつ伴作用（コノテーション）をスタンダールは小説のなかで利用している。これがラクロの影響であるか否かは判然としないが、かれがラクロを意識しているのは『アルマンズ』における偽手紙を述べた箇所で見たとおりである。

しかし、スタンダールが書いたのは三人称小説であり、その小説中に手紙が飛び交っているわけであるが、本章のはじめで細かく辿ったように、手紙の文章そのものが出てくることは少ない。しかも、付け加えれば、テキストの示される手紙も完璧に全文が示されるものばかりでなく、「云々 (etc.)」とか省略符つまり三点リーダー（…）で端折られることがある。スタンダールは、手紙を寄せ集めて成り立たせる書簡体小説が、ともすると冗漫と

なり、また場合によっては嘘くさくなることを見抜いていたのかもしれない。

手紙は、テキストが提示されない場合でも、その手紙がどのように出されたか、あるいは受け取られたか、などの様態を示すことによつて、細ごました叙述の省略を可能にし、物語を進展させるのに貢献しているが、適切に手紙のテキストを挿入することも、同様に描写や叙述を節約する役目を持っていると考えられる。例えば『ラミエル』において、この主人公の人物像は、「クレマン神父がブローニユにいる親友に書き送った」ものという形で、神父の手紙によつて簡潔に描かれる(第六章)。また、シエラン神父の紹介状や、ラ・モール侯爵の招請状、仲間からの脅迫状といった類のものをわざわざ手紙のテキストで提示するのも、説明を節約するためと考えられる。

とりわけ、このように手紙を挿入することは、三人称の物語に一人称を混ぜることになり、時には手紙の筆者である登場人物の複雑な思考なり心理なりを内側から簡潔に語ることになる。三人称だけで外側から人間の心のなかを描き分析していくことは、時に文章を煩雑にする。また、書簡体小説では、手紙を交わす人物たちのたくさんの《わたし》^[1]が錯綜することになるが、三人称小説においては、会話や手紙、場合によつては日記といった一人称のものを適度に加えることで、小説が変化に富んだものになる。しかし、この場合でも、『会話』の多用は、戯曲とは異なつて、

小説を安易なものにし、また複雑なことがらを述べるとなると冗漫な長台詞になることを免れない。そこで手法としての手紙は有効性を發揮するし、またそのためには、手紙のテキストの主要部分だけを抜粋して挿入するということも効果を高めることになる。

スタンダールの小説で、館のなかとか、屋敷のなかの、たやすく出会える場所にいる当事者が手紙を交換するのも、会話では意を尽くしきれないことを伝えることにある。もちろん、それだけでなく、手紙では対面しては言いにくいことを表現することができる。ただ、手紙はともすると誤解を生むこともありえる。つねに文章はレトリックによつて、書き手と読み手のあいだで微妙なズレを生じ、それが書き手の予期しない感情を読み手のうちに引き起こしたりすることがあるものである。スタンダールの小説のなかの手紙では、そこまではあまり問題にされていない。手紙を書く人物に応じて、文体を変えろというようなことも特に配慮されていない。手紙のテキストは物語のテキストのなかに溶け込む。それが字義通りに受け取られることを前提としている。

しかし、手紙を出すことへの警戒は絶えず繰り返される。シャステレル夫人やフェルヴァック元帥夫人やグランデ夫人のためらいだけでなく、マチルドでさえ「英雄的に」それを乗り越える「書いたものは残る」のである。『ラミエル』のなかではじめに主人公の教育を行なったサンファン医師は、彼女に「決して手紙を書いてはいけない。もしそのような失敗をしたら、最初のものを取

り戻すまで二通目を出してはいけない」(第六章)と忠告する。この時代は現代とはちがって、女性が男性に手紙を書くことはたしなみに欠けると考えられていたのである。スタンダールの小説は、登場人物たちがそうした警戒を破ったところからドラマが展開する。登場人物たちは手紙に翻弄されることにさえなるのである。

スタンダールの小説においても、『危険な関係』でヴァルモン子爵がメルトウイユ夫人宛の手紙に証拠物件として数々の手紙を同封するように、他の手紙を同封するということが見られる。ジュリヤンが友人のフーケへの手紙にマチルドの手紙(複数)を同封する場合は、もしかに異が待ち構えていたら、それがかれを救う証拠となると考えるからである。オクターヴがアルマンス宛の手紙に彼女のメリー・ド・テルサンに宛てた手紙(実はスーピラーヌの書いた偽手紙)を同封し、またラ・モール侯爵が娘のマチルドに宛てた手紙にレナール夫人の手紙を同封するのは、それによって動かぬ証拠を見せようとするものである。さらに、レナール夫人が自らに宛てた偽手紙の原稿をジュリヤンへの手紙に同封するのは、共犯関係を通してのゆるぎない愛情の証なのである。翻つて、これをスタンダールの手法のうえから見ると、作品のなかで手紙のテクストを示すのと同じく、手紙のなかでも他の手紙のテクストを提示した方が、明快であることからきている。

しかし、手紙が小説のなかの重要な役割を占めることは、小説そのものが安易な手法をとっているような感じを与えないわけで

はない。偽手紙がオクターヴやエレナや、あるいはジュリヤンのような主人公を死に追いやり、物語を結末に導き、またファブリスを偽手紙でおびき出し牢獄に幽閉することで、物語を大きく転換すること、これだけを考えるとまさにそのように思える。だが、振り返って見れば、これまで述べてきたように、手紙は随所で、内容のみならずその伴示作用を利用することによって、細くまとした描写や叙述で文章をだれさせることなく、スタンダールの小説にスピード感を与えているのである。スタンダールは手紙の機能を利用して、より無駄の少ない、それでいて豊穡な小説を創造したと言えるだろう。

テクスト

『エルネステス』『アルマンス』『赤と黒』は、ブレイヤード版『小説作品全集』第一巻(二〇〇五)による

『リュシヤン・ルーヴェン』は、ブレイヤード版『小説作品全集』第二巻(二〇〇七)による

その他の作品は、セルクル・デュ・ビプリオフィル版スタンダール全集による。『カストロの尼』(第一八巻「イタリア年代記」所収)、『パルムの僧院』(第二四、二五巻)、『ラミエル』(第四四巻)

註

- (1) ツペタン・トドロフ著『文学と意味』(Tzvetan Todorov: *Littérature et signification*, Larousse, 1967) 一八七頁。
- (2) 《ポルトガル尼僧の手紙》は、ポルトガルの尼僧マリアナ・アルコフオラードが自分を棄てて帰国したフランス軍士官に宛てた手紙五通を、ギルラーク伯爵 *comte de Guilleragues* (1638-85) が仏訳したものとされている。最近の研究では、ギルラークの創作と考えられている。スタンダールもこれを愛読した。『恋愛論』の冒頭、「情熱恋愛」の例の最初に挙げられている。
- (3) 例えば、イギリスではサミュエル・リチャードソンの『パミラ』(一七四〇)、フランスではルソーの『新エロイズ』(一七六一)、ドイツではゲーテの『若きウェルテルの悩み』(一七七四) など。
- (4) 『危険な関係』は、コデルロス・ド・ラクロが砲兵士官としてスタンダールの故郷であるグルノーブルに滞在していた際に、その社交界で見聞したことをもとに書いた書簡体小説である。スタンダールはそのことを『アンリ・ブリュレルの生涯』第六章で書いている。また『エゴチスムの回想』では、「あの有名なラクロは、ミラノの参謀本部の機軸席でわたしが知ったときは老將軍だったが、『危険な関係』ゆえに表敬訪問するとわたくしがグルノーブルの出身である」と知って、感動したのだ、(「第一章」と書いている(傍点は原文イタリック))。
- (5) スタンダールとラクロの『危険な関係』に関する文献として、イヴ・アンセル他編『スタンダール事典』(二〇〇三)は次のものを挙げているが、筆者は未見。L. Sclarioli, *Stendhal et la clef des Liaisons dangereuses*, Stendhal Club 2, 1959, pp.19-29
- (6) ジェラール・ジュネットは、スタンダールの小説の登場人物のコミュー
- ニケーションが、決定的な場面でエクリチュール(書かれたもの)に依拠していることを指摘した。Gérard Genette *«Stendhal» in Figure II*, édition du seuil, 1969, pp.163-166
- (7) あえて付け加えれば、後述の『カストロの尼』における館のなかのエレナとその窓下のブランチフォルテのあいだで交わされる合図によるコミュニケーション、そして未完作品『スコラステイカ尼』における修道院のなかのロザリンドとその窓下のジェンナリーノのあいだでの指による合図のコミュニケーションがある。
- (8) 『恋愛論』の第二章は「恋の誕生について」というタイトルをもち、恋する人の心のなかで継起することを述べている。現在では「エルネストース」を『恋愛論』の補遺として収めている版が多い。
- (9) プレイヤード版『小説作品全集』第一巻、四五七ページ
- (10) ラクロにおける手紙の機能についてはすでに註1であげたトドロフの『文学と意味』(邦訳：菅野昭正&保刈瑞穂訳『小説の記号学』、大修館書店、一九七〇年)を参照
- (11) スタンダールはその作品で、三人称でありながら、一人称で語るような手法である(『自由間接語法』*Style indirecte libre*を多用していること)で有名。